

研究ノート

『スーダン遺跡紹介』 第8回 ジェベル・バルカル (Jebel Barkal) その1

坂本麻紀 (アラブ調査室研究員)

はじめに

スーダン遺跡紹介の8回目は、クシュ王国 (Kingdom of Kush) の王たちが「聖なる山 (Holy Mountain)」として崇拜したジェベル・バルカルを紹介します。

ジェベル・バルカルはナイル川第4急湍のナパタ (Napata) 地域にある高さ 100m ほどの砂岩の山で、エジプトの国家神であるアメン神 (Amen) が住む山として、エジプトの新王国時代 (New Kingdom ; 1550-1069 BCE¹) には宗教上重要な役割を担っていたと考えられます。エジプトを支配した第 25 王朝 (クシュ朝 ; 714-656 BCE²) のクシュ王たちはヌビア (Nubia)³ 地域の編年ではナパタ期 (Napatan Period ; 1000-300 BCE⁴) に属しますが、ナパタ地域を活動の拠点としていたナパタ期だけでなく、メロエに拠点を移したメロエ期 (Meroitic Period ; BCE 300-350 CE) にも、クシュ王たちはジェベル・バルカルの麓に神殿や王宮を造営しており、千年以上に亘ってジェベル・バルカルは重要な場所であったといえます。

ジェベル・バルカルは前回紹介したクッルと同じく世界遺産に登録されており、スーダンに行く機会があれば、ぜひ訪れていただきたい遺跡です。今回はジェベル・バルカルとクシュ王たちが崇拜したアメン神について紹介し、山の麓に造営された神殿や王宮、そしてジェベル・バルカルの西側に建つピラミッドについては次回紹介したいと思います。



図1 夕暮れのジェベル・バルカル (西から)
※右側の奇岩は王冠を載せたコブラが頭を持ち上げているように見えます。

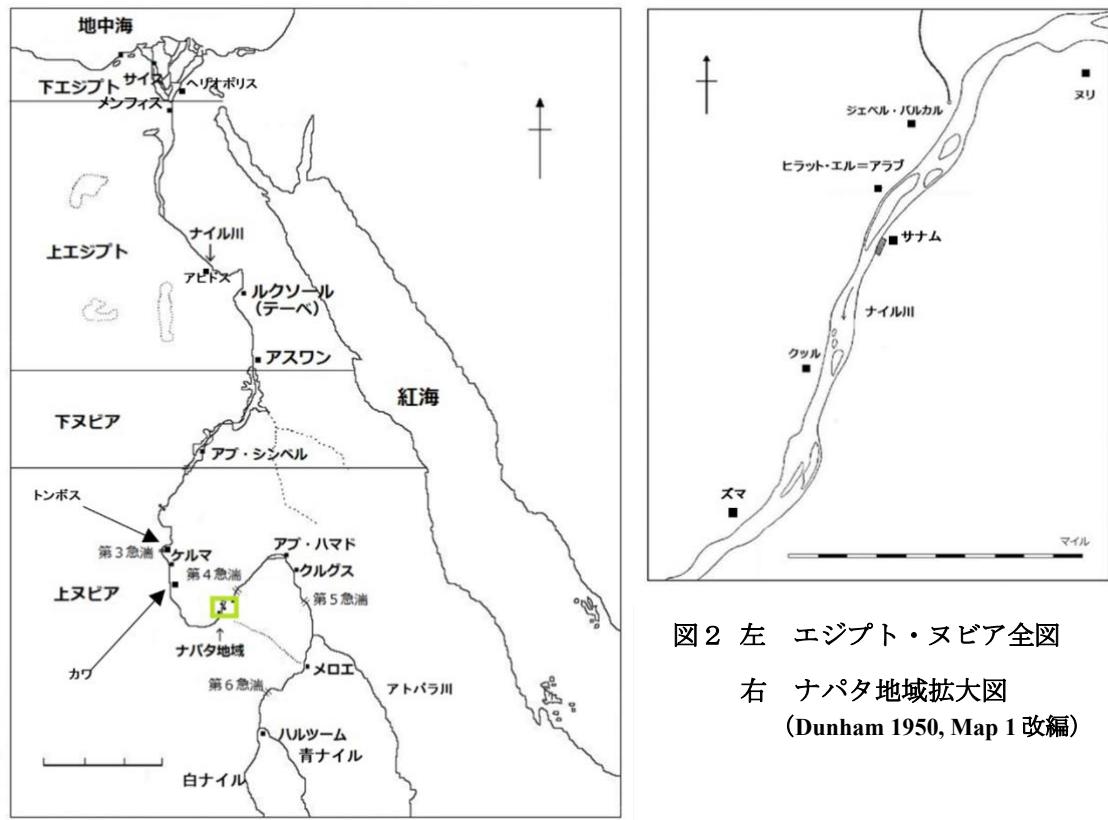
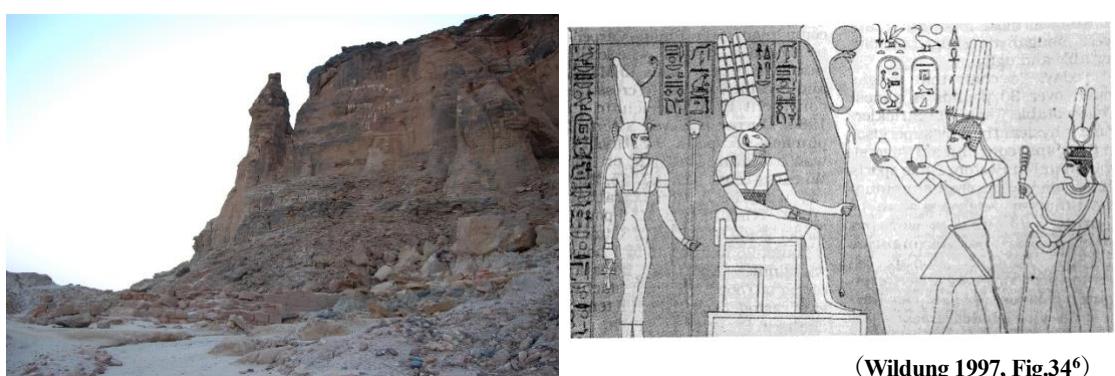


図2 左 エジプト・ヌビア全図

右 ナパタ地域拡大図
(Dunham 1950, Map 1 改編)

1. ジェベル・バルカル

ジェベル・バルカルは頂上がテーブル状になった巨大な砂岩の一枚岩で、ナイル川第4急湍の下流のナパタ地域にあります。ナイル川の右岸、川から 1.5km ほどの距離（緑地帯を抜けた砂漠地帯）に、砂漠の地表面からの高さ約 104m⁵、長さ約 250m の巨大な岩が南東から北西にかけて広がっています。神殿址などがある南東側（ナイル川方面）は高さ 80~90m の断崖絶壁となっていますが、その崖の端で特徴的な奇岩を見ることができます。この奇岩はウラエウス（Uraeus）と呼ばれる下エジプトを象徴するコブラが王冠を被り、頭を持ち上げて直立した姿に見えることから、古代においても図像で表されています。



(Wildung 1997, Fig.34⁶)

図3 左：奇岩（東より）、右：ジェベル・バルカルに住む羊頭のアメン神とタハルカ

図3右はジェベル・バルカルの麓にある岩窟神殿B300の壁画を描いた図です。B300の紹介は次回いたしますが、この神殿は第25王朝のクシュ王タハルカ (Taharqa ; 690–664 BCE) がこの地にあったエジプトの新王国時代第18王朝後期に建造されたムウト女神 (Mut) の神殿 B300-sub を建て替えたものです。ここにはタハルカが王妃とともにジェベル・バルカルのアメン神と妻のムウト女神に供物を捧げる場面が描かれており、岩山の中に座るアメン神 (羊の頭) は二重の長い羽と太陽円盤を組み合わせた冠を被り、ジェベル・バルカルの奇岩がある場所には太陽円盤を頭に載せたウラエウスが描かれています。少々分かりにくいですが実物の壁画は彩色が施されています (図4)。

また、描かれている図像が少々異なりますが、エジプトのアブ・シンベル (Abu Simbel) にあるラメセス2世 (Rameses II ; 1279-1213 BCE) の大神殿にも、ジェベル・バルカルの岩山の中で座るアメン神 (人の姿) と、岩山の奇岩の部分に上エジプトを象徴するエジプトの白冠 (White Crown) を被ったウラエウスが描かれている図像が大列柱室の南壁に描かれているそうです⁷。アメン神については次の章で取り上げます。

ジェベル・バルカルの南東は断崖絶壁ですが、反対側 (北西側) は礫の丘陵となっており、ここから頂上へ登ることができます。古代の人々が神の住む聖なる山に登っていたのか分かりませんが、頂上から見渡すナイル川と緑地、そして砂漠のコントラストは、おそらく古代の人々が暮らしていた景色と変わらないのではないでしょうか。ジェベル・バルカルを訪れた際には頂上に登ることをお勧めします。

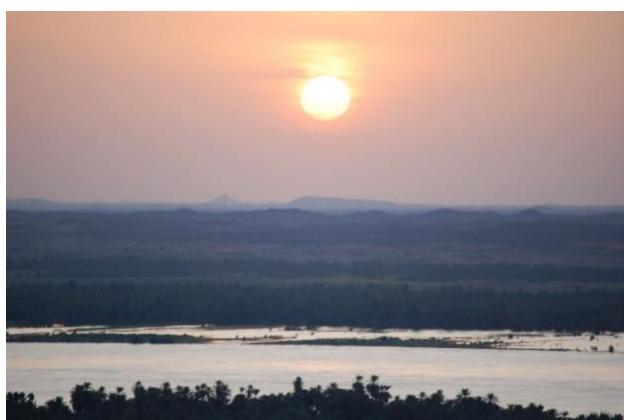


図5 ジェベル・バルカル頂上からの景色

左 朝日とナイル川

右 奇岩と緑地、砂漠、ナイル川



図4 B300 岩窟神殿の壁画



2. ジェベル・バルカルに住むアメン神

第 25 王朝のクシュ王たちの本拠地は、ナイル川第 4 急湍の南西に位置するナパタ地域であり、その中心はアメン神が住む「聖なる山」ジェベル・バルカルです。クシュ王たちが崇拝したジェベル・バルカルに住むアメン神は、エジプトの国家神として描かれるアメンと少々異なります。エジプトでは通常、アメン神は人の姿で描かれますが、ジェベル・バルカルでは羊の頭（湾曲した角）を持った人間として描かれます。ただし、この羊頭のアメン神がヌビアで最初にみられるのは、エジプトの

新王国時代にヌビアに遠征したトトメス 1 世

(Thutmose I ; 1504-1492 BCE) がナイル川第 5 急湍の北に位置するクルグス (Kurgus) に残した岩絵⁸とされ、またナパタ地域ではアメン神殿 B500 から見つかったトトメス 3 世 (Thutmose III ; 1479-1425 BCE) の碑文が最初とされています⁹。余談になりますが、古代エジプトにあまり馴染みのない方でも、ハトシェプスト女王 (Hatshepsut ; 1473-1458 BCE) という名前を聞いたことがあるのではないかと思います。トトメス 1 世はハトシェプスト女王の父で、トトメス 3 世はハトシェプスト女王の夫で異母兄であるトトメス 2 世 (Thutmose II ; 1492-1479 BCE) と側室との子ども（継子）になります¹⁰。

エジプトのルクソール (Luxor)¹¹にあるアメン信仰の総本山であるカルナック神殿 (Karnak) では、アメン神は人の姿で描かれているにもかかわらず、なぜエジプト王のトトメス 1 世やトトメス 3 世はアメン神を羊頭で描いたのか、と疑問に思う人も多いと思います。これについて理由を示す証拠はありませんが、エジプトがヌビアを支配する新王国時代以前、ヌビアにはナイル川第 3 急湍のケルマ (Kerma) を中心とした強大な力を持った首長制社会があり、彼らの墓に犠牲獣として羊と一緒に埋葬されたことなどから、ヌビア地域と羊との関係が可能性の 1 つとして挙げられています¹²。

ヌビア地域の羊頭のアメン神は、ルクソールのアメン神の「地方の姿」と見なされていましたが¹³、第 25 王朝のクシュ王の時期からルクソールとヌビアのアメン神はほぼ同じ重要性を持つようになります¹⁴。ヌビアでは羊頭のアメン神が基本的な姿となり、ナパタだけでなく、ナイル川第 3 急湍にあるカワ (Kawa) や、ナイル川第 6 急湍の近くにあるナガ (Naga)、ムサッワラート・エス=スフラ (Musawwarat es-Sufra)、メロエ (Meroe) といった広い範囲で羊頭のアメン神が見られることがあります。



図 6 羊頭のアメン神とピアンキ

(Kendall 1997, Fig.39)



図 7 羊の姿のアメン神とタハルカ

※大英博物館にて

3. まとめ

今回は「聖なる山」ジェベル・バルカルと、そこに住んでいるとされる羊頭のアメン神について簡単に紹介しました。ジェベル・バルカルは高さが 100m ほどあるため、頂上から遠くまで見渡せます。また、反対に遠くからでも目立つため、ジェベル・バルカルから 10km ほど上流のナイル川左岸にクシュの新たな王墓地としてタハルカが造営したヌリからもジェベル・バルカルが見えます。ジェベル・バルカルは太陽が昇る前に頂上に登り、ゆっくり御来光を楽しむのがお勧めです。岩山の西側は砂丘のようになっているところがあり、急勾配ですが頂上から砂山を下りることもできます。下りた先には今回紹介できなかつたピラミッドもあり、神殿群、王宮址、ミニ博物館など見所は非常に多いです。

次回はジェベル・バルカルの麓や周辺に広がる神殿や王宮、ピラミッドなどを取り上げる予定ですので、どうぞお楽しみに。

参考文献

- Dunham, Dows** 1950, *El-Kurru, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.1)*, Boston, Harvard University Press.
- Gabolde, Luc** 2020, *The Amun Cult and its Development in Nubia*, in G. Emberling & B. B. Williams (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Nubia*, Oxford University Press, New York, 2020, 343-368.
- Kendall, Timothy** 1997, *Kerma and the Kingdom of Kush, 2500-1500 B.C.: The Archaeological Discovery of an Ancient Nubian Empire*, Washington, D.C., National Museum of African Art.
- Kendall, Timothy** 2020, *Jebel Barkal: “Karnak” of Kush*, in G. Emberling & B. B. Williams (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Nubia*, Oxford University Press, New York, 2020, 449-474.
- Török, László** 1997, *The Kingdom of Kush : Handbook of the Napatan-Meroitic Civilization*, Leiden, Brill.
- Török, László** 2002, *The Image of the Ordered World in Ancient Nubian Art : The Construction of the Kushite Mind (800 BC-300 AD)*, Leiden, Brill.
- イアン・ショー & ポール・ニコルソン, 『大英博物館古代エジプト百科事典』内田杉彦(訳), 原書房, 1997 年。

¹ エジプトの年代については、展示図録「大英博物館ミイラ展：古代エジプト 6 つの物語」(朝日新聞社, c2021-2022) を参照し、第 25 王朝を除くエジプト王の治世年については、「大英博物館古代エジプト百科事典」(原書房, 1997 年) を参照しました。

² 編年に関しては証拠となる文字資料が少ないこともあり、研究者あるいは文献によって違いがあります。第 25 王朝に関しても誰を最初の王とするか、また王の治世年をどのように計算するのか、ということが研究者間で異なり、文献によって編年は様々です。今回は近年支持されている王位の順番、シャバタカ、シャバカ、タハルカ、タヌタマニの 4 人の王の治世年を第 25 王朝としています。

³ スーダン遺跡紹介では「ヌビア」という用語を古代のスーダンの地理的な領域を示す用語として使用しています。ヌビアは国の名前ではない、という点をご理解いただけだと良いかと思います。

⁴ ナパタ期の始まりについては、はっきりした証拠がないため研究者によって年代に違いがあります。

今回、ナパタ期とメロエ期の年代に関しては Marjorie M. Fisher (ed.) 2012, *Ancient Nubia: African Kingdom of the Nile*, The American University in Cairo Press, Cairo. を参照しました。

⁵ ジェベル・バルカルの大きさ（高さや長さ）は文献によって違いがあります。今回は研究者のケンダル (T. Kendall) の 2020 年の論文 *Jebel Barkal: “Karnak” of Kush* を参照しています。

⁶ Dietrich Wildung (ed.) 1997, *Sudan: Ancient Kingdoms of the Nile*, Flammarion, Paris.

⁷ Kendall 2020, p.459.

⁸ このクルゲスの羊頭のアメン神は2枚の羽根と太陽円盤を持っているそうです (Gabolde 2021, p.346)。

⁹ Török 2002, p.48.

¹⁰ トトメス3世の治世年とハトシェプスト女王の治世年が重なっているのは共同統治の期間があるためです。トトメス2世の死去に伴い即位したトトメス3世が幼かったため、ハトシェプストは摂政となります。その後、ハトシェプストが自ら王として即位しました。共同統治となっていますが、実際にはハトシェプストが王権を握り、トトメス3世が完全に王権を握るまで即位から20年以上かかった（おそらくハトシェプストが死去したため）と考えられています（ショー 1997, pp.358-359, 418-419）。

¹¹ 古代エジプトではワセト Waset と呼ばれる都市でしたが、ギリシア人がこの町をテーベ Thebes と呼んだことから、現在でも古代の都としてテーベという呼び名が一般的に使われるようです。

¹² Gabolde 2020, p.345.

¹³ 羊頭のアメン神はクシュの人自身によってカルナックの神の local form であるとみなされた、と書かれています (Gabolde 2020, p.344)。

¹⁴ Gabolde 2020, p.349.